

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：12201  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2010 ～ 2012  
 課題番号：22720002  
 研究課題名（和文）ヘーゲル及びドイツ観念論における生命概念研究  
 —現代社会における倫理問題の礎として  
 研究課題名（英文）Eine Forschung nach dem Lebensbegriff  
 in Hegel und dem Deutschen Idealismus  
 -zur Begründung der akuten ethischen Probleme -  
 研究代表者 山田 有希子  
 宇都宮大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：90344910

研究成果の概要（和文）：本研究のテーマは、ヘーゲルおよびドイツ観念論における生命概念であり、テキスト解釈を軸とする。その目的は、現代社会におけるさまざまな倫理問題（生命倫理、環境倫理、教育問題等）を考えるための手がかりとして、改めて生命の意味を考えることにある。

研究成果の概要（英文）：The subject of the sought concerns the concept of "Leben" in the theory of Hegel and German idealism. Its objective is to review the meaning of "Leben" and then solve various moral issues of modern society.

### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：生命倫理 西洋倫理学 ヘーゲル ドイツ観念論 生命論

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の申請年度（09年）には、日本において、臓器移植法が12年ぶりに改正され、「脳死」をめぐる論争が再び社会問題となった。私たちは、さまざまな先端医療技術（遺伝子解析・診断、iPS細胞、ES細胞研究を主軸とする再生医療等）のめざましい進展とともに、出生前・着床前診断、尊厳死・安楽死問題など、従来の死生観を大きく変革しうる課題に直面している。

申請者は、それまで、『いのちの倫理学』（コロナ社 2004年、「医師の配慮か、患者の自

己決定権か」（2002年）他における理論的考察を、実践的にも1）大学附属病院（自治医科大学附属病院）の治験審査委員として、新薬開発にかかわる臨床の場での「患者と医師の関係」をめぐる問題へと還元し、さらなる倫理的諸問題の概念整理につとめてきた。また、2）教育学部所属の哲学・倫理教員として、同附属小・中学校の授業実践（とりわけ「道徳教育」）にも携わり、「生命倫理」教育の名のもとに、「存在を許される生とそうでない生」とを選別するような、無批判的な「優生主義」的風潮を、そして、子供たちにまで広がる「自殺願望」「自傷行為」「鬱病」

といった心理的・道徳的問題状況を、目の当りにしてきた。

申請者は、以上の二つの「現場」との共同研究をすすめてきた中で、哲学という立場から、改めて「生命とは何であるか」という問いに関する倫理的・哲学的な概念整理を強く要請されてきた。しかし、哲学・倫理学の研究者の立場からは、国内外を問わず、その切実な問いかけに、いまだ十分に、積極的に応え得ているとはいえないというのが、厳しい現実である。申請者は、それゆえ、18-19年度、まずはヘーゲル哲学の立場から、その「生命」概念研究を重ねきた（科研課題番号1972001）。本研究は学術研究としてはその継続研究に当たる。今回は、研究をすすめる上で、哲学専門コミュニティにおける対話および成果発表を重ねるだけでなく、それを基礎としつつも、より学際的で、市民的な立場から、上記問題にアプローチしていくことを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究は、ヘーゲルの「生命 (Leben)」概念の研究から開始され、第二に、それを J.W.v.Goethe, I.Kant, J.C.F. Hoelderlinら、ドイツ観念論者たちの「自然(Natur)」概念との関係から考察する。第三に、「ドイツ観念論哲学」の枠には収まらない、同時代の自然哲学者・生物学者たち (L.Oken, J.F.Blumenbach) も視野にいれ、彼らとの思想的相互関係も研究対象とする。

最終的には、その研究成果を、哲学専門領域に限定されたものとしてではなく、現代社会問題において、哲学者が十分に答えていない「生命とは何か」という問いへの基礎付けとして、学際的観点に位置づけることを目的とする。

## 3. 研究の方法

### ① 本研究を遂行する上での具体的な工夫

#### (その1) 文献研究

研究はまずドイツ観念論の基礎的な文献研究を基礎にすすめられた。

1) ヘーゲル哲学における生命論関連のテキストは、主として、①*Phänomenologie des Geistes*および*Wissenschaft der Logik*, Erstes Buch .1812/13 および、ドイツ・ボーフムにおけるヘーゲル研究所 (Hegel Archiv) から新たに出版され、注目を集めている *Nürnberger Gymnasialkurse und Gymnasialreden (1808-1816)* (Klaus Grottsch

編) および, *Schriften und Entwürfe ; unter mitarbeitet von Theodor Ebert (Manfred Baum und Kurt Rainer Meist 編)* である。次に、

2) J. W. Goethe, I. Kant, J. C. F. Hoelderlinらドイツ観念論の自然哲学書研究をすすめ、1)における考察との相関関係を明らかにする。その際、「生命論」の基礎付けという課題においては、当然、同時代の自然哲学者・生物学者たちとの思想的影響関係も無視することはできない。それゆえ、

3) L. Oken, J. F. Blumenbach、そして、自然哲学者としての F. W. J. Schelling の見解も研究対象とする。生命論および自然をテーマにした文献は、ヘーゲルにおいては未公刊の講義録や草稿に、そして、2) および3) の思想に至っては、邦訳すらなされていない資料に集中しており、本研究は文献研究としても意義のあるものとなる。平成22年度は、1) および2) に集中的にとりくみ、その成果を、平成23年3月開催の日本ヘーゲル学会第9回大会において発表する(「ヘーゲル哲学における生命の概念について—ドイツ観念論思想との相関関係から—」(仮題))。3)については、主として平成23年度の研究範囲とする。

#### (その2) 電子テキストの有効活用

以上の文献研究に際しては、一次資料を熟読・吟味することが必要となるが、研究効率を上げるために、国内外問わず入手可能な電子テキスト (Hegel-Texte-Daten Buch, Hegel by Hyper Text 他) を十分に活用する工夫をはかる。電子テキストの活用により、より広い範囲にわたる文献を渉猟し、かつ、「生命論」に関連する膨大な用語検索、概念分析を迅速かつ正確なものとするを目標とするものである。

#### (その3) 海外研究者 (Hegel Archiv) との連携

申請者は21年度までの四年間、日本ヘーゲル学会の学会誌『ヘーゲル哲学研究』の編集委員をつとめ、日本語文献目録の管理を担当しており、日本におけるヘーゲル研究についての動向を正確にかつ網羅的に把握している(「ヘーゲル日本語文献目録2004~05年」「ヘーゲル論理学における邦語文献の動向調査(2001-2007)」。さらに海外研究者との連携および、国内未公刊のヘーゲル文献研究をより積極的に推進していく方向を模索する。特に、ドイツ・ボーフムにおけるヘーゲル研究所 (Hegel Archiv) の Walter Yeaschke 氏の著書 *Hegel Handbuch* を目下共同翻訳中であり (弘文堂 2013年出版予定) であり、

同氏の指導を仰ぎながら、日本におけるヘーゲル研究を進めた。

#### (その4) 医学研究者 および 他分野研究協力者との実践的連携

##### 1) 栃木県花王株式会社 生物科学研究所研究員との連携

申請者は、平成18年度より花王株式会社生物科学研究所における研究倫理審査委員を務めており、生物研究を機軸にした製品開発(化粧品、家庭用品、工業用製品)における倫理問題を検討している。本研究における生物研究者との連携も密であり、研究途上における<人体への介入>および、<ヒト由来の研究試料の扱い方>をめぐる倫理問題を検討する上で、彼らとの迅速な情報・意見交換が可能である。

##### 2) 医療現場(自治医科大学附属病院)との連携

申請者は、平成15年度より、大学附属病院(自治医科大学附属病院)における治験審査委員会委員を務めている。ここでは、とりわけ新薬の開発にかかわる臨床の場での<患者と医師の関係>をめぐる医療倫理問題の現状にふれ、さらにその問題を論じてきた(拙論「医師の配慮か、患者の自己決定権か」および『いのちの倫理学』参照)。医療の現場において<生命とは何か>を考える上で、不可避である、医師・看護師との情報・意見交換のネットワークもすでに密である。また、同病院放射線科医師とともに、目下、<終末期医療における「患者の痛み」について>の共同研究を計画している(21年度準備会合3回開催)。申請者は、ヘーゲル哲学の立場から、「生命」および「自己意識と痛み」に関する哲学史上の基礎付けとともに、医療現場における倫理問題の概念整理の試みを重ねている。

##### 3) 宇都宮大学附属小学校における「道徳研究会」との連携

申請者は、平成15年度より、教育学部附属小学校の道徳教育実践に携わり、年に二度開催される定期大会、および、宇都宮大学サマーセミナーを通じて培ってきた現職教員との連携を基礎にしながら、教育現場における<生命とは何か>という問題を、哲学専門の立場から、明らかにすることを目指している。

#### 4. 研究成果

報告者は、18-19年度、まずはヘーゲル哲学の立場から、その「生命」概念研究を重ねきた(科研課題番号1972001)。本研究は学術研究としてはその継続研究に当たる。

##### (1) 基礎的文献研究

本研究は、第一に、報告者の専門研究対象であるヘーゲルにおける「生命(Leben)」論の研究から開始され、第二に、それをJ.W.v. Goethe, I.Kant, J.C.F. Hoelderlinら、ドイツ観念論者たちの「自然(Natur)」概念との相関関係から明らかにすることを目指した。第三に、「ドイツ観念論哲学」の枠には収まらない、同時代の自然哲学者・生物学者たちとの思想的相互関係をも視野にいれ、L. Oken, J.F. Blumenbach、そして、自然哲学者としてのF.W.J.v. Schellingの見解も研究対象とした。

なお、ヘーゲルに関しては、その主著*Phänomenologie des Geistes* および *Wissenschaft der Logik, Erstes Buch*. 1812/13における「生命(Leben)」論の考察はいうまでもないが、さらに、ドイツのボーフムにおけるヘーゲル研究所(Hegel Archiv)から新たに出版され、注目を集めているヘーゲル初期講義・論文集① *Nürnberger Gymnasialkurse und Gymnasialreden (1808-1816)* (Klaus Grotzsch編) および、② *Schriften und Entwürfe; unter mitarbeitet von Theodor Ebert (Manfred Baum und Kurt Rainer Meist編)* に定位し作業を進めた。

##### (2) 「教員養成学部」における「哲学」の果たすべき役割について

本研究は、報告者が教育学部所属の教員として、すなわち、<教員養成>を担う一哲学教員として、哲学という学問が、大学教育において果たすべき(あるいは、果たしうる)役割とは何かについて考える上でのひとつの手がかりにもしたい。報告者が誰よりもまずその倫理的責任を負うのは、担当学生であり、それゆえ、(1)の学術「研究」的側面のみならず、最終的には、学生への「教育」的側面をもっとも考慮しながら研究をすすめた。その過程においては、<生命とは何か>に関する、学生たち自身の生の声や考え方も、ひとつの貴重な研究対象にすべきものと位置づけている。その関連研究として、平成18年度宇都宮大学学内若手奨励研究および、基盤研究(C)「人間学的特殊教育学の哲学的小および倫理的基礎付けの試み」(代表山田 全紀)があり、本研究はその発展研究

として位置づけられる。

## 5. 主な発表論文等

### ・博士論文

山田有希子, 『逆さまの世界』としてのヘーゲル哲学—矛盾と反復の論理学— 東京大学大学院人文社会系研究科, 2013年3月提出。6月現在審査中。

[雑誌論文] (計2件)

・山田有希子, ヘーゲル哲学における生と死の概念について—『論理学』における「生命の矛盾」を基盤として— (査読なし), 『宇都宮大学教育学部紀要』第1部 2013年63号 pp.103-116

・山田有希子, ヘーゲル論理学における「矛盾」の概念とカントのアンチノミー論批判 (査読あり), 『ヘーゲル哲学研究』2011年17号 pp.163-177

[学会発表] (計4件)

### ・招待講演

山田有希子, ヘーゲル哲学における生と死の概念について— 論理学における「生命の矛盾」を基盤として, 日文研共同研究会平成23年度第6回研究会 国際日本文化センター, 2012年3月・ワークショップ

### ・ワークショップ提題者

山田有希子, 仮象から反省へ 『大論理学』本質論第一篇第一章「A. 本質的なものと非本質的なもの」および「B. 仮象」を読む, 第13回 日本ヘーゲル学会研究大会 お茶の水大学, 2011年6月

### ・個人研究発表

山田有希子, ヘーゲル論理学における「矛盾」の概念とカントのアンチノミー論批判 第12回 日本ヘーゲル学会研究大会 新潟大学, 2010年12月

### ・合評会 (評者)

山田有希子, 千田有紀著『ヒューマニティーズ 女性学/男性学』(岩波書店 2009年) 学士会館, 2010年9月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山田 有希子 (YAMADA YUKIKO)  
宇都宮大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 90344910

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者 なし